

七尾港

石川県土木部港湾課

〒920-8580 金沢市鞍月1丁目1番地

☎076-225-1111(代)、076-225-1746(直通)

URL: <http://www.pref.ishikawa.lg.jp/minato/index.html>



1. 概況

七尾港は、能登半島中央部の七尾湾の南湾に位置する石川県管理の重要港湾である。古くは香島津かしまづと称され、北に能登島を天然の防波堤とし、東は七尾湾を形成する崎山半島に囲まれた天然の良港として古くから栄えた港である。

応永5年(室町時代)に畠山満則が能登の守護となり、七尾に居城を築き、奥州、佐渡、越後を始め、遠く中国大陸とも通商し、当時の七尾商人の清国へ輸出の中心地となっていた。また、江戸時代末期には、加賀藩が七尾軍艦所を開設し、洋式軍艦が配備され、大型船舶が常時出入りし、七尾港周辺は隆盛をきわめたといわれている。

明治32年7月には、勅令による開港場としての指定を受け、ウラジオ定期航路の寄港地となり、明治37年には、七尾線から鉄道を分岐して臨港線が敷設され、名実とも陸路と海路を結合するに至った。明治末期より大正にかけて、航路浚渫、航路標識、荷揚場の建設が行われ、近代的な七尾港の姿となったのは大正8年頃である。昭和2年には第二種重要港湾に指定となり、昭和4年より第一期の修築工事が直轄事業で実施され、物揚場の築造や埠頭の築造、並びに水面貯木場の建設が行われ、昭和18年に第一期の修築が完了した。その後、昭和22年8月には、戦後寂れていた七尾港も指定貿易港として認可され、また、昭和26年1月には重要港湾として指定された。

昭和30年代から北洋材の輸入が活発化し、同38年は矢田新第2ふ頭が水深-9mに改良され、1万トン級の貨物船が接岸できる岸壁が完成した。さらに同62年までに大田地区に新たに1万5千トン級の貨物船対応の-10m岸壁及びふ頭が整備された。

昭和47年には、七尾港の新たなエネルギー基地として先駆けとなるLPG配分基地が三室地区に立地し、(液化ガスターミナル(株))水深14mの航路と6万トン級タンカーが接岸できる栈橋が完成した。

昭和50年代より北陸電力(株)が大田地区において火力発電所の立地を決め、大型の石炭運搬船を入港させるため、昭和63年に水深14m~15mの外内航路、平成5年には6万トン級のけい留栈橋の整備が行われた。その後、平成7年に石炭を燃料とする1号機(50万kW)を、平成10年には2号機(70万kW)の稼働を開始した。また、県・市が三室・鷓浦地区で誘致を進めていたLPG石油国家備蓄基地が平成17年7月に完

成し、エネルギー基地としての機能向上を図っている。

大田地区においては、木材流通基地として、さらなる物流機能の強化を図るため、平成3年度より大水深岸壁(-13m)の整備を進めており、平成24年度には3万トン級の大型貨物船が直接入港可能となる水深11mで暫定供用している。

また、矢田新地区では、震災時における海上からの救援物資の受入や物資輸送の防災拠点として、また、人が行き交う交流拠点として、耐震強化(旅客船)岸壁(-7.5m)を整備し、平成27年5月に供用を開始した。

一方、地元青年会議所が中心となった町おこし運動が始まり、行政・民間が連携し設立した第三セクター「(株)香島津」は、県内初の民活法特定施設等整備事業を活用し、平成3年にフィッシャーマンズワーフ「能登食祭市場」をオープンさせた。現在年間約80万人の来訪者があり、活況を呈している。さらにこれに隣接して平成14年に七尾マリンパークが完成し、七尾港の賑わい空間の拠点となっている。

なお七尾港は令和元年には開港120周年を迎えており、今後とも能登地域の物流拠点としての機能充実を進めながら、客船の入港にも力を注ぎ、能登地域における「海の玄関口」として交流機能の充実にも努め、七尾港の飛躍につなげていきたい。